鹿児島県青年海外協力隊を支援する会会報

積乱雲

南国真夏の入道雲　JOCVのバイタリティー

第38号（2015・3）

●編集・発行
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
鹿児島市卸本町８－20
TEL　099－268－9711

（題字・前会長　石神　兼文）

平成26年度　鹿児島県ボランティア家族連絡会を開催

平成27年2月15日（日）、かごしま市民福祉プラザにおいて「鹿児島県ボランティア家族連絡会」が開催され、留守家族９家族10人を含む30名が参加しました。

会は鹿児島県青年海外協力隊を支援する会の弓場事務局長、JICA九州市民参加協力課、田中課長の挨拶に続き、来賓の鹿児島県観光交流局国際交流課、柿内課長補佐に挨拶をいただきました。続いて田中課長より、派遣中隊員の現地生活における諸待遇や、安全・健康管理においての支援体制を中心にJICAボランティア事業について概要説明がありました。その後、現在活動中の隊員から送られた家族宛ての手紙や現地での活動の様子が紹介され、目頭が熱くなる場面が見受けられました。最後に、弓場進路相談カウンセラーより帰国後に受けられる支援や、鹿児島県における帰国隊員の現況など詳しい説明と報告がありました。

昼食時にはご家族から協力隊OVへ任国や活動についての質問が尽きませんでしたが、会終了後には「治安を懸念していたが、JICAの体制を詳しく説明してもらった事で安心した。」「帰国後の就職についても話が聞けてほっとした。」「手紙によって自分の子どもがこんなにも成長していたことに気付かされた。」などの声が聞かれました。その他にも「毎週連絡を取っており、明日から配属先での活動がスタートすると聞いた。」「任地ではこんな人達と触れ合い、こんな活動をしているようだ。」と通信環境の進歩により、逆にご家族から最新情報を頂くこともありました。帰られる頃には不安や疑問も解消された様子で、それぞれにとって有意義な家族連絡会となったようです。

JICA事業概要説明

帰国後の進路について
（弓場進路カウンセラー）

出席者全員集合

国際協力講演会開催

平成27年2月15日（日）、かごしま市民福祉プラザにおいて国際協力講演会が開催され130名の市民が参加しました。

第一部は、「アフリカ・アジア諸国を中心とした開発途上国の現状と将来」と題してJICA理事柳沢香枝氏による講演会が行われました。乳幼児死亡率、妊産婦死亡率の高い地域はサハラ以南や南アジア地域に集中し貧困問題と直結しています。JICAの支援として日本の母子手帳を活用して母と子の健康を守る取り組みや、地域で仕事を生みだし貧困から抜け出せる取り組み支援の実例が示されました。今年は青年海外協力隊派遣50周年を迎え、JICAボランティア経験者数は累計4万人を越えました。開発途上国での経験は技術、チーム作り、創意工夫など日本でも活かされています。また、これまで約110名のJICAボランティア経験者が復興庁に採用され被災自治体で活躍しています。最後に貧困問題について、自分とは違う世界の出来事ではなく例えばコーヒーを買うときにどこの国でどのように栽培されたのかを考えてみるなど、自分と外国との繋がりを意識することが大切で、また日本の社会全体に関心を持つことが世界の格差縮小に貢献することに繋がると語りました。

第二部は青年海外協力隊帰国隊員による報告会が行われ、吉留正樹さん（平成21年度2次隊エルサルバドル　文化財保護）平井香織さん（平成24年度3次隊マラウイ　言語聴覚士）が活動の報告をしました。

吉留さんはエルサルバドルの文化庁文化遺産局考古学科に派遣され、カサブランカ遺跡公園での遺跡調査・保護の活動に取り組みました。応募時は考古学研究、自己のキャリア形成のためという気持ちが大きかったが、協力隊としての活動を通して、積極的に活動することの大切さ、日本での社会還元の必要性を強く感じるようになり、この4月から協力隊経験者として採用される鹿児島市職員としても自分にできることをがんばっていきたいと語りました。

平井さんはマラウイで聴覚障害児への教育支援の他に、他隊員と協力して5教科以外、体育などの授業を行ったり、鹿児島の高校生から贈られたリコーダーを教育に活用したりするなどの活動を行いました。自分で仕事を見つけ率先して働く中で同僚に認められ、ボランティアに対する態度が変わっていったと語りました。またマラウイでは女性が差別されていたという現実に触れ、日本では教育の機会が平等にあり水準も高いことを改めて実感し、教育を受けた日本人として余力はボランティア活動に充てることが大切なのではないかと語りました。

ロスポンチョスによる南米音楽の演奏、協力隊50周年の歩み、初代隊員の白黒写真とエピソード、鹿児島県出身隊員の活動パネル展示にも多くの参加者が興味を示し協力隊50周年記念事業のスタートを飾る講演会となりました。

JICA理事柳沢香枝氏による講演

協力隊50周年パネル

青年海外協力隊による帰国報告会

派遣中の隊員から

平成25年度1次隊　タンザニア
自動車整備　室屋 洸治

私は、タンザニアの北西に位置するビクトリア湖畔の街ムワンザで活動しています。普段は、VETAと呼ばれる職業訓練校で生徒たちに自動車構造、整備について指導して、空いている時間を利用して日本語やバレーボールを教えています。タンザニアに来る前は料理などほとんどすることは無かったのですが、今住んでる家の近くにレストランが無いためほぼ毎日自炊生活をしています。そのおかげで今ではカレーライスをルーから作れるようになりました。COOKPADってホントに便利ですね。

タンザニア人は陽気で人懐っこいですが、仕事が遅く嘘ばっかりつくのでタンザニアに来た当初はイライラしていました。色々と海外には行きましたが、日本の常識がここまで通用しない国は初めてです。最近は私もタンザニア人みたいにゆっくりとした生活になってしまったので日本に帰ってからの逆カルチャーショックが心配です。残りの任期も少ないので悔いの残らないよう最後までやりきりたいと思います。

平成25年度3次隊　ザンビア
理科教育　峰元 貴久

こんにちは、元気ですか？
ザンビアは雨期に入り、雷によってよく停電する季節になりました。また激しい雨のせいで至る所で道路が崩れています。ただ、そんな中、日本車の素晴らしさを実感しています。たまにヒッチハイクをするのですがどんな悪路であっても走破してくれます。やっぱり車は日本車に限るなと感じています。いつか、お金を貯めてランドクルーザーを買いたいと新たな目標が出来ました。

さて、活動は二年目に入り、いろいろと忙しくなってきました。学校に理科室が無いので理科の先生方と理科室を作ろうと動き出しています。理科室ができることで生徒達により多く実験をさせてあげることが出来るのではと感じています。日々の授業も自分の英語力の向上とともに伝えられることも増えてきて、充実してきました。ただ、ほとんどの生徒達はお金が無く大学に行くことが出来ず、一部

の生徒たちは授業料が払えず、学校を去って行かざるを得ない状況です。このような、自分の力の及ばない問題に直面し、無力感を感じる事も多くあります。
活動も半分を過ぎ、少しでも実りある活動になるよう健康、安全第一で頑張ろうと思っています。

出発隊員紹介

青年海外協力隊　26年度3次隊

◎ 原口　巧基
☆ タンザニア
◇ 数学教育

数学は真っ先に敬遠される教科の代表例かもしれませんが、私たちの生活に与えてくれるものがとても多いのも事実です。そんな数学の面白さを伝えたいですし、将来の自分の教員生活にとっての糧となる２年間を過ごしてきたいと思っています。

◎ 藤本　悠太
☆ ラオス
◇ コミュニティ開発

福岡県出身ですが、鹿児島の企業から現職参加のため鹿児島出発でお世話になります。ラオスの農村地域の生活向上に繋がる活動ができればと思います。まずはじっくりと調査を頑張りたいです。

（平成26年9月～平成27年1月）

帰国隊員						
	青年海外協力隊					
	鍵山　隼人	PCインストラクター	ガーナ	桑原　佑佳	音楽	モザンビーク
	桑山　　大	体育	モンゴル	布市　未来	看護師	ボリビア
	平井　香織	言語聴覚士	マラウィ			
	シニア海外ボランティア					
	岩元　善巳	水産物加工	ミクロネシア			

会員募集中です。

１人の多くの人の応援が、海を越えた若者たちを勇気づけ、そのエネルギーが地球中に広がります

年会費：① 個人会員：５,０００円／口　② 特別会員：１０,０００円／口
振込先：鹿児島銀行卸本町支店（普）８２９０６７
名義人：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　会長　衛藤威臣
なお 会員みなさまには　月刊誌「クロスロード」が送付されます

編集後記

ラオスへの初派遣から始まった青年海外協力隊事業は、平成27年で発足50周年を迎えます。鹿児島県からは協力隊・シニア・日系・日系シニアを合わせこれまでに830名を超えるボランティアが途上国で活躍し、帰国後それぞれの道で活躍しています。
平成27年8月29日（土）には、鹿児島東急インにて伊藤聡子氏（フリーキャスター・事業創造大学院客員教授）による記念講演会、パネルトーク、記念式典を開催いたします。私たち一人ひとりができる国際協力について一緒に考えましょう。多くの方々の参加をお待ちしております。